

第10号様式(第7項関係)

政務活動出張報告書

令和4年11月17日

会派名

代表者 浦田 関夫 様

出張者 浦田 関夫 黒木 初

次のとおり、政務活動（視察調査）のため出張したので、その概要を報告します。

- 1 出張先 兵庫県美方郡香美町
岡山県英田郡西粟倉村
兵庫県姫路市

- 2 出張日時 令和4年11月14日～ 令和4年11月16日

3 政務活動事項

- ・（香美町）「香美町学校間スーパー連携チャレンジプラン」について
- ・（西粟倉村）小水力発電事業について
- ・（姫路市）文化財を活かした観光施策について

4 政務活動結果

別紙記載

5 費用

調査研究費 ￥133,340

西粟倉村視察負担金（資料代含む）￥8,700

11月14日 香美町へ会派視察へ行きましたので報告いたします。

概要

香美町は、2005年城崎郡香住町、美方郡美方町・村岡町の三つの町が合併。合併当初は人口26,000。現在は人口16,448人 世帯数は6,406世帯となり、県内ではトップクラスの人口減少幅になっており、人口減少に伴って子供の数も減少しており、児童数は10校で696人。4校で複式学級となっている。

「香美町学校間スーパー連携チャレンジプラン」

「香美町学校間スーパー連携チャレンジプラン」は、「小規模校の長所」を生かしながら「多人数での授業」に取り組むにどのようなことが必要になるのかで、平成24年に教育環境アンケートを実施。「多人数での授業ができない」「積極性や競争心が育ちにくいのでは」などの不安要素があることを把握。そこで、小規模校の少人数学級での不安の解消、子供たちの確かな学力を定着させる。今までにない、新しい発想とチャレンジとして「香美町学校間スーパー連携チャレンジプラン・学力向上ステップアップ授業」を行う事を決めた。

現在の教育条件を有効に活用しながら、学校間連携により「子どもたちの生きる力の育成」を進める。平成25年度から香美町内の小規模校9小学校で取り組む「香美町学校間スーパー連携チャレンジプラン」は、小規模校でのきめ細かな指導のプラス面を活かすとともに、マイナス面を克服するため学校間連携を推進し、小規模校同士が合同で効果的な多人数指導と小人数指導を実践する。

小規模校9校が2つのグループに分かれて、それぞれのグループ内で、実施回数(年間10回程度)、時間数(年間30時間程度)、実施日、授業内容などの詳細を計画して行われている。

所感

今回視察した香美町から取り入れるべきは、安易な小学校の統廃合ではなく、小規模校の強みを活かした教育のあり方を見習い、取り入れるべきだと考えます。

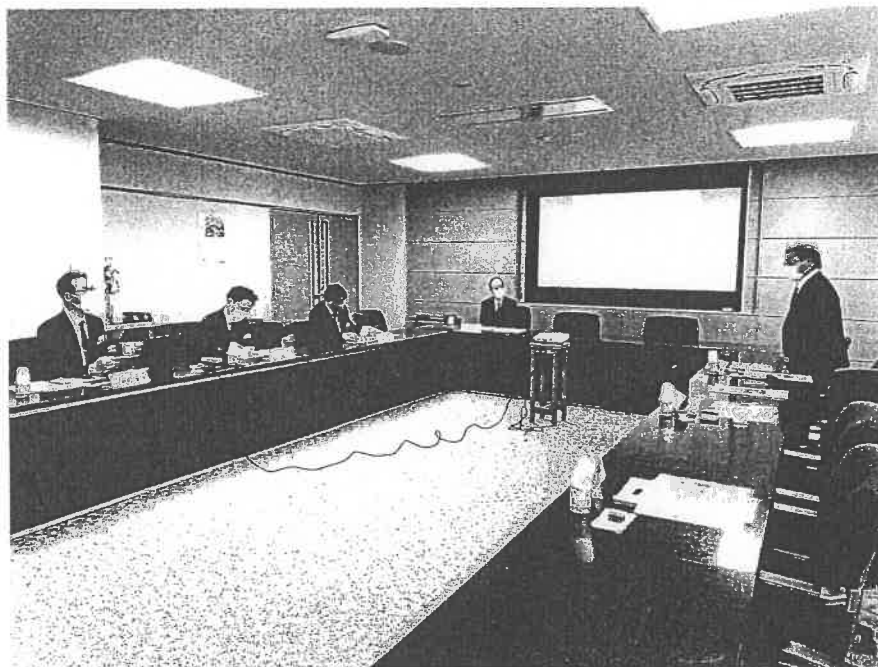
香美町の「チャレンジプラン」は、「小さなコミュニティーの人間関係だけでは競争心や切磋琢磨できない」「同じ人間関係ではコミュニケーション能力が育たない」といった問題点を他の小学校と合同で授業を行うことで、小規模小学校でありながら、大人数での学びの場を作ることにもなっています。

そんな取り組みの中でも近年人口減少が進み、児童数が減少。香美町は教育環境会議を開き、「統合を望む」が3分2を超えたため、学校の統廃合を緩やかに進める決断をしました。そんな中でも保護者からは、「チャレンジプラン」は今後もやってほしい。という強い要望が寄せられており、開始から10年経過しての成果として、児童では①コミュニケーション能力(話す力聞く力)の向上②人間関係構築力、主体性の向上③小1プロブレム、中1ギャップの解消④入学当初の高い安定感⑤社交性・社会性の向上が見られた。教師としては①多面的・効果的な指導方法の交流②指導力の向上(特に若い教員)③指導形態の工夫④異動があっても児童との関係がすぐ構築できる。などの効果があらわれた。2020年11月に行った第二期香美町教育復興基本計画に関する意向調査(中学生評価)では、「チャレンジプラン」の評価は意義を感じているので回数

を増やしてほしい23.3%意義を感じているので内容を充実させてほしい21.7%意義を感じているので現状を継続してほしい34.8%など前向きな意見が79.7%にのぼり、あまり意義を感じていないのでやめてほしいと答えたのは2.9%でした。

生徒からは、新しい友達との出会いや仲間づくり、さまざまな考え方に触れること、大勢の前ではっきり話せることなどが上位を占めました。

子どもたちの可能性や個性を伸ばす事と共に、他県へ出て行っても帰ってくる。回帰率の向上につなげる「るふるさと教育」を考えることも視野に入れるべきだと思いました。



11月15日 西粟倉村へ会派視察を行いましたので報告いたします。

概要

当日の説明 産業観光課 課長補佐 白旗佳三さん

西粟倉村 面積57.97km² うち森林93%のうち86%が人工林。人口1,412人 607世帯 高齢化率38.1%

西粟倉村の3つのチャレンジ。

百年の森事業。ローカルベンチャー事業。再生可能エネルギー事業。

2004年前西粟倉村長、住民アンケートの結果（反対58.33%）合併協議会を離脱し、西粟倉村自主独立の決意を表明。2008年「百年の森林構想」着想し、2009年「西粟倉村森林管理運営に関する基本合意書」を締結。「百年の森林事業」開始。低炭素な村作りをスタート。2013年1月岡山県スマートタウンパイロット地域指定。同年3月に環境モデル都市選定（内閣府）2014年3月バイオマス産業都市認定（農林水産など7府省）2022年4月脱炭素先行地域選定。

西粟倉村は、2004年に住民アンケートの結果で合併しないことを選択。

西粟倉村に何があるのかを見直し、衰退する一次産業にフォーカス。2008年公的財源を投入し百年の森林構想が始動。

2004年地域再生マネージャー事業（総務省）でアマタHDの代表取締役会長 ■■■■■さんとの話し合い（2週間に1回）行い、第一次産業が元気になれば、中山間地域は活性化し、大量生産・大量消費の時代が終わり、20世紀モデルが終焉を迎える。これからは、関係性とストーリーを大切にしたい産業を創出する事で、人と人のつながりを大切にする事で潤う地域経済＝「心産業」が必要になることをもとに2週間に一度行われる話し合いでこれからの西粟倉をどうしていくのかを真剣に議論し方向性を決めました。2008年に百年の森林構想が動き出し、短期的な経済視点ではなく長期的な経済視点を備え、林業市場経済よりも良い山を育てることに重点を置き、【行政（川上）×民間（川下）】に分野分けを行い「百年の森林構想」は実現にむけて動き始めました。

1400人の小さな村で、12年間で47の事業が生まれ、206人が定住。

所感

西粟倉村では、再生可能エネルギーを段階的に取り入れており、間伐で出た木材をもとに、薪ボイラー（図1）を導入し、温泉施設加温3施設などをおこない燃料コスト削減。その後に、木質チップボイラーを導入、地域熱供給システム（図2）を整備し、公共施設の暖房・温水が使用可能に。同じ木質チップ（乾燥水分量は異なる）を使用して小型ガス化発電（図3）も行い公共施設の自家消費や災害時の自立電源として災害を想定して備えられていました。これらの施設も

「百年の森林」事業に合わせたものになっていました。

小水力発電では、2つの水力発電での売電収入が1億1千万あり、その収入を活用して森への再投資、家庭への再エネ導入支援（図4）に使用。

低炭素な村づくり推進施設設置補助金として平成25年4月から始まっており、高効率給湯器や複層ガラス、省エネ型電気冷蔵庫買い替えなど幅広く使える補助金を設けて導入促進を図られていました。

また、マイクロ水力発電を導入し電気がないトイレなども電気がつくように工夫がされていました。また災害時にも水さえ流れていれば電気自動車が充電できるような施設(図5)がありました。西粟倉村は「百年の森林構想」をもとにして、一つの事業から2つ3つの事業へ派生していくようなベンチャー企業がつくられ面白い連鎖が構築されていました。

唐津市で取り入れるべきは、私有林を村が委託契約で預かり、管理・間伐を行い間伐材の収益を私有林を預けている個人と村で収益を折半。森林を維持していることで、私有林の荒廃を防ぎ、災害の防止に寄与しています。

唐津市でも同じようなシステムを取り入れることで、第一次産業の一つである林業を活性化させ働く場の創出につながるのではないかと考えるものです。

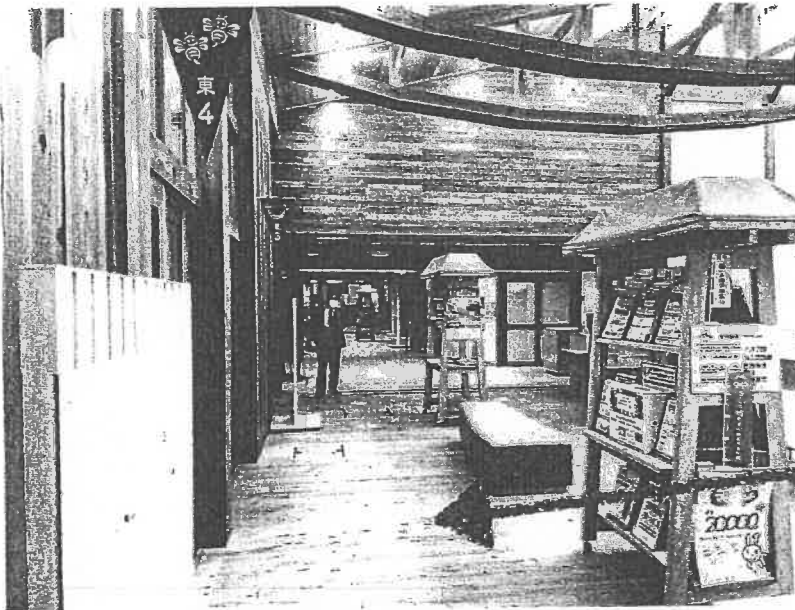


図2 地域熱供給システム
西粟倉村役所 床暖房

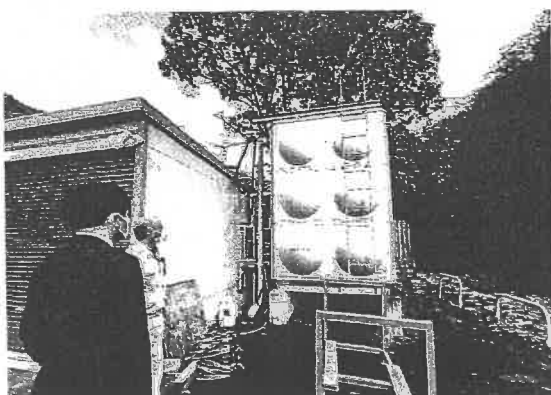
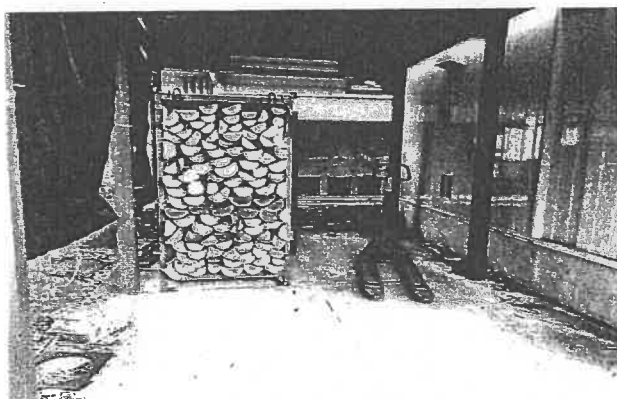
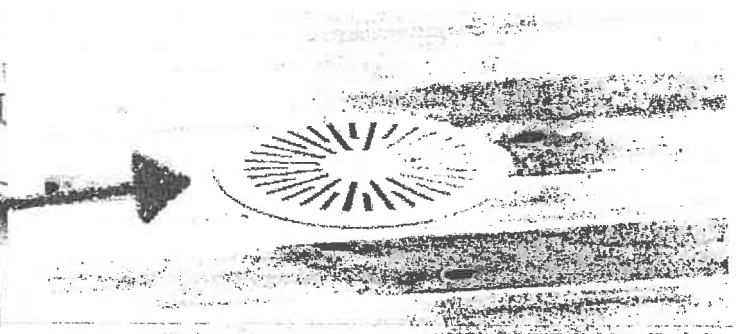


図1 薪ボイラー、熱貯蔵タンク

図2 木質チップボイラー
地域熱供給

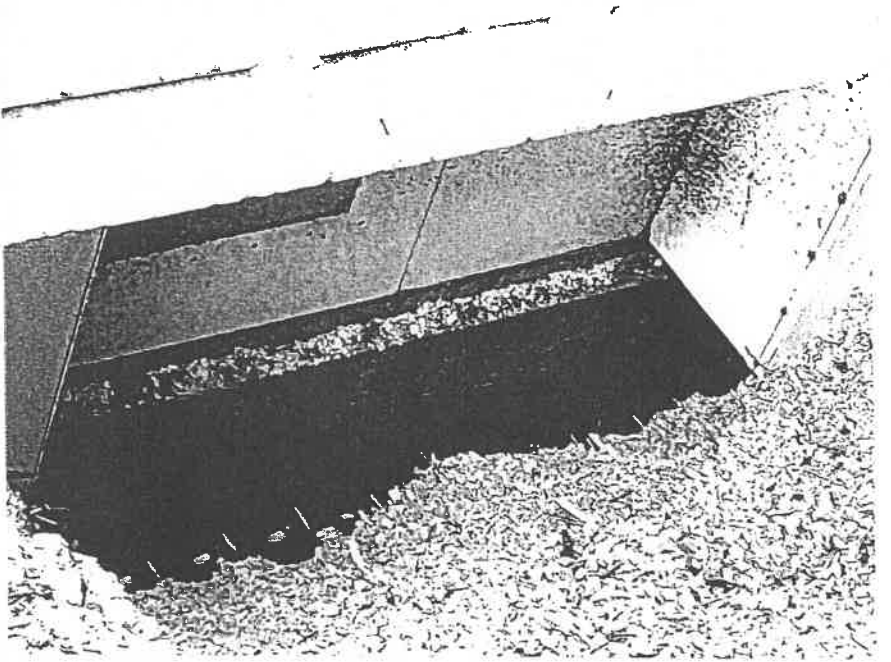
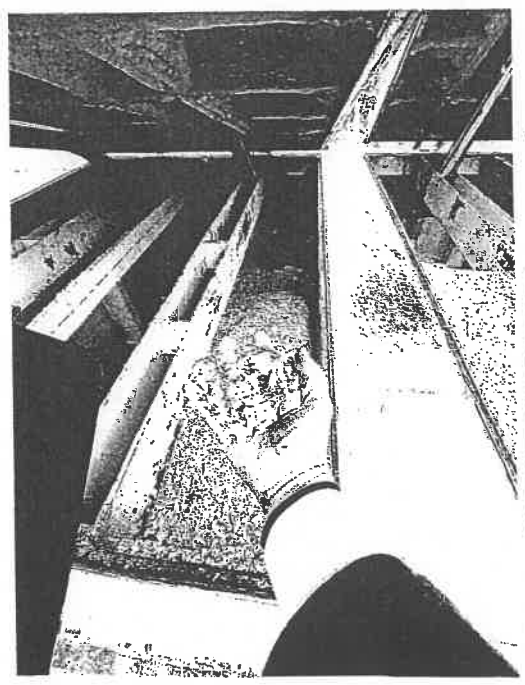
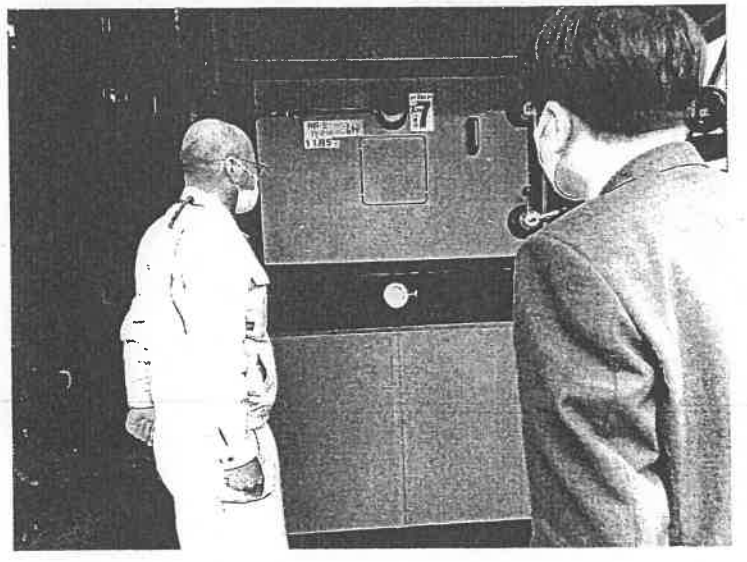
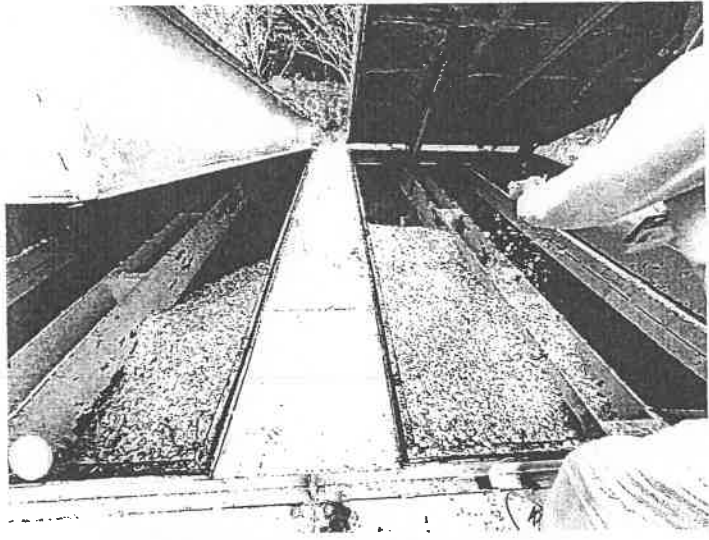
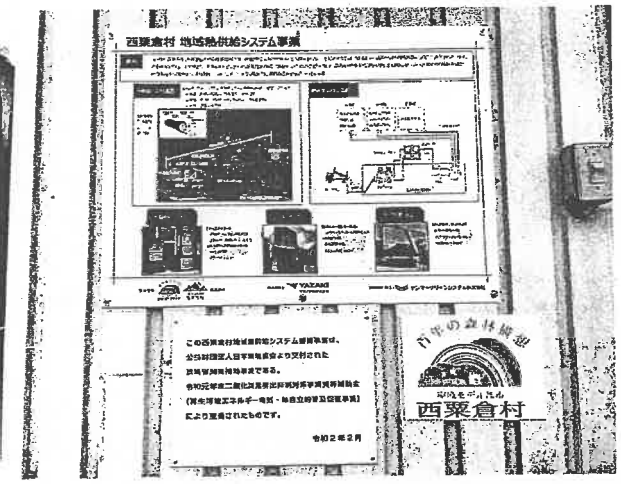
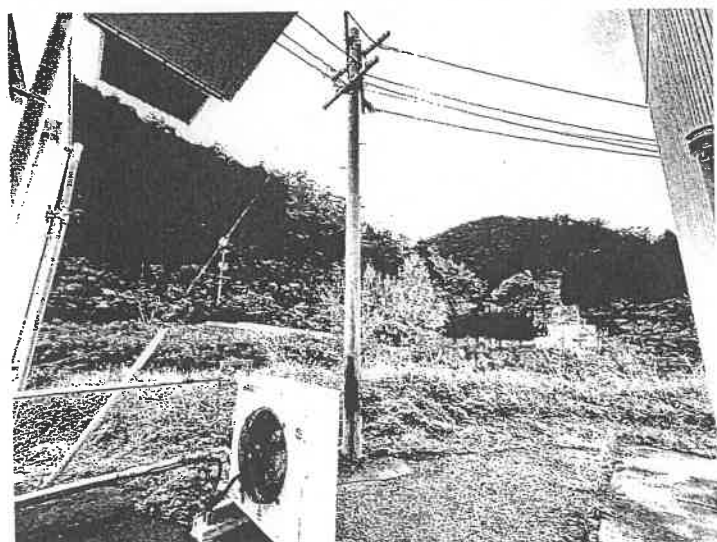
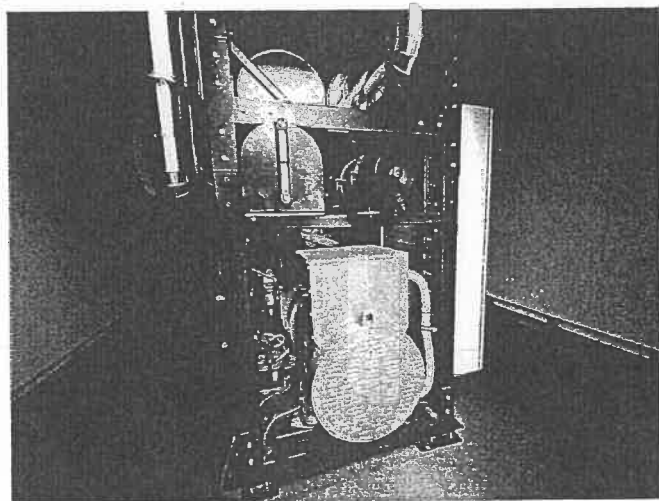
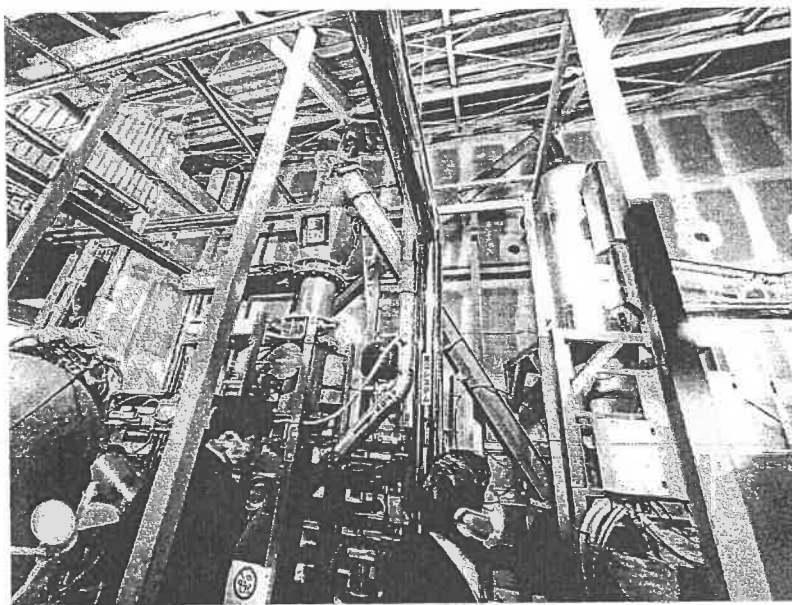
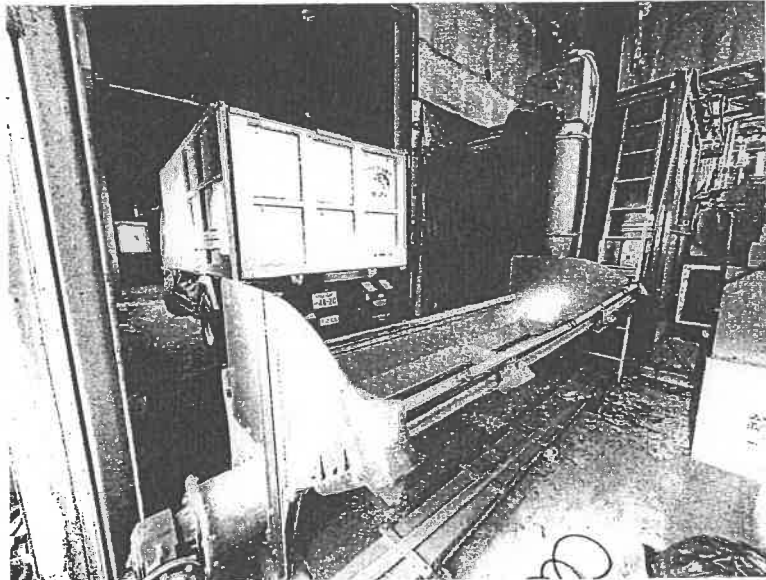
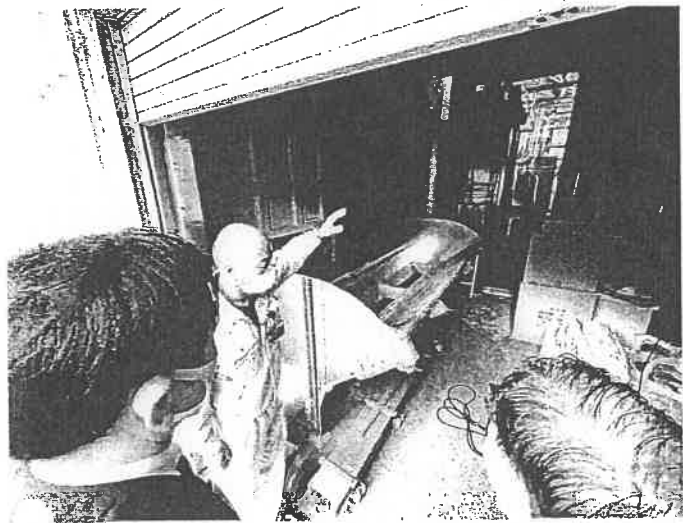


図3 木質チップ小型ガス発電



避難所への電気を供給



図4
家庭への再エネ導入支援
一例
太陽光発電、薪ボイラー

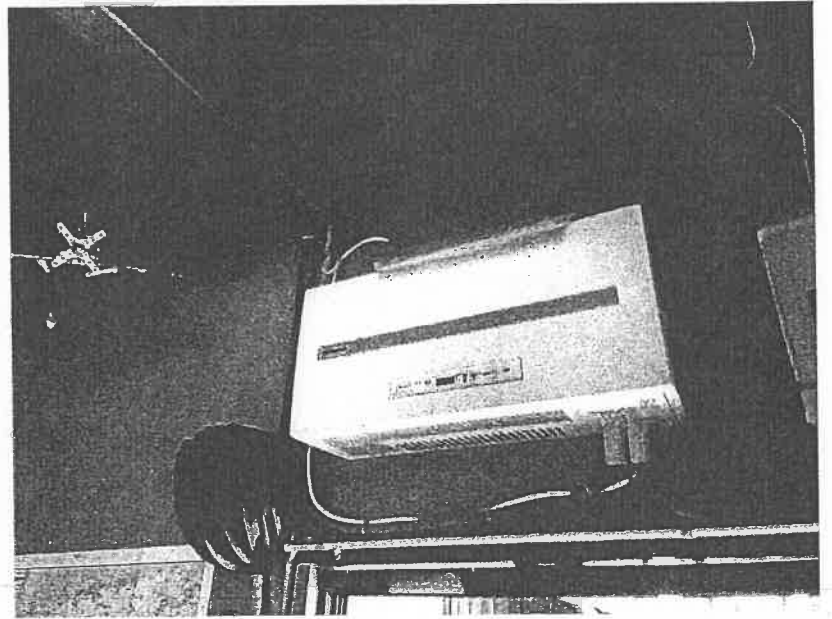
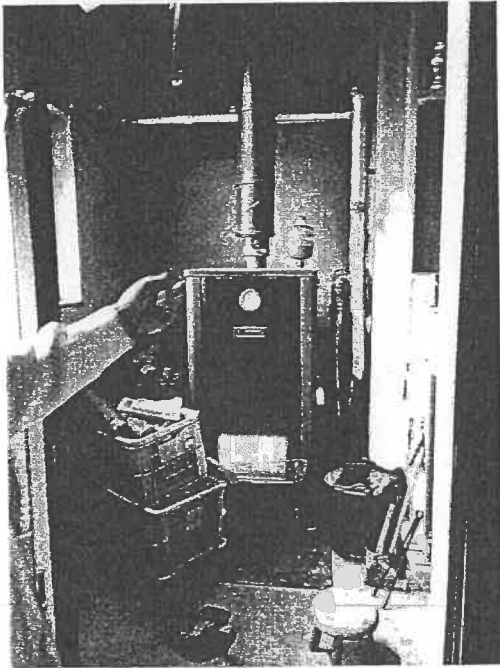
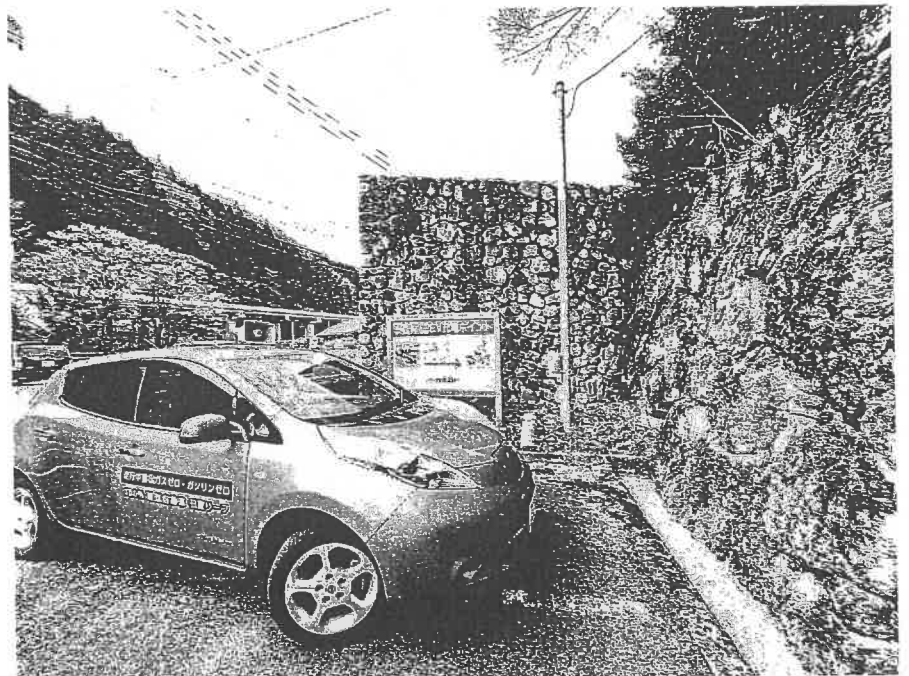
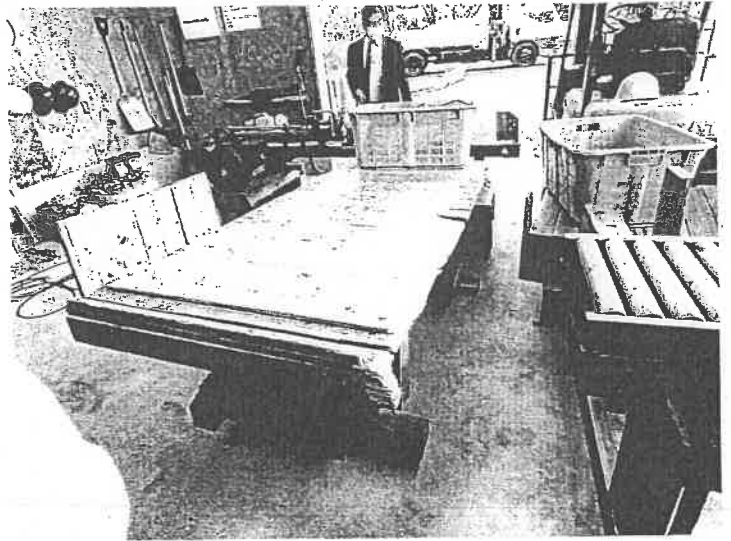
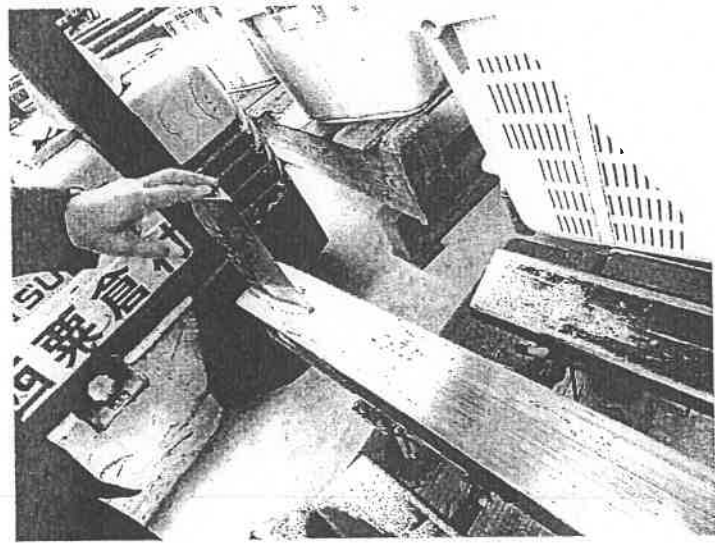
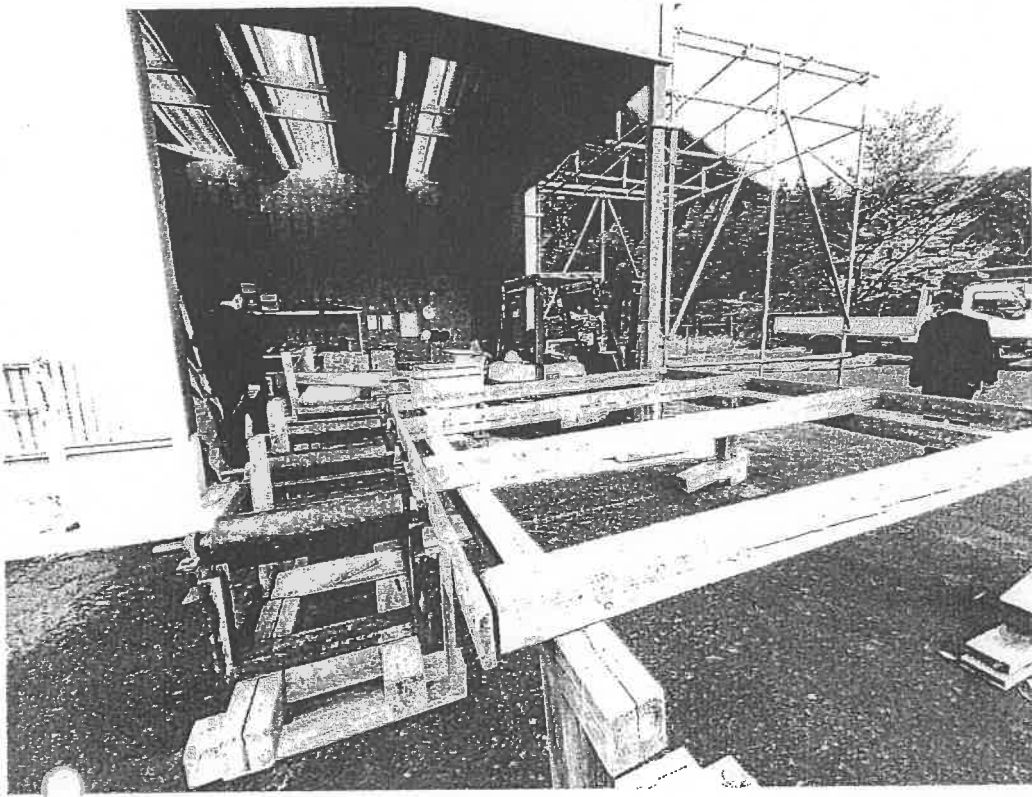


図5
災害時用EV充電スポット





薪ボイラー用薪割り施設

概要

人口 525,365人 面積534.35km²

姫路市総入り込み客数の推移は平成28年度は10,267人だったが、新型コロナウイルス感染症が全国的に感染拡大した影響で令和2年度は総入り込み客数は3,254人と最低水準を記録。昨年度は4,209人。

姫路市荘入り込み客数の推移として、姫路城周辺の利用客が多く、姫路城を観光して別の県へ移動してしまう人が多く、滞在時間をいかに伸ばすかがネックとなっている。

姫路市では入り込み客数の多い姫路城周辺に絞った姫路市観光戦略プランを作り、姫路の観光将来像として「観光を通して、賑わいと感動にあふれるまち姫路」～訪れてみたい、また来てみたいと感じるまち 姫路を目指します～ 計画期間は令和4年度から令和8年度までの5年間で行い、この将来像のために姫路市は5つの戦略として、1観光コンテンツの磨き上げによる魅力向上2観光客のニーズを踏まえた受入環境3効果的なプロモーションによる誘客促進4国際会議観光都市・MICE都市の推進5観光を生かした産業復興・地域づくりの促進としています。

この戦略を実現させるための4つの視点として、デジタル技術の活用、大阪関西展博徒の連帯・活用、SDGs持続可能な社会への貢献、DMOによる観光地域づくりを用いて姫路の観光の5年後の将来像へ進んでいきます。

姫路市では、「姫路コンベンションビューロー」「地域※DMO(観光省)」令和4年11月4日に認定。

※自治体などが中心となって、国内外から国際会議やビジネス商談会などを誘致する組織のこと。コンベンションとは、「人がある目的をもって集まる会」という意味。コンベンションビューローの活動例として、ちば国際コンベンションビューローは、2020東京オリンピック・パラリンピック事前キャンプなどの招致を行っている。

コンベンションビューローは、「ビジネスイベント誘致」、「観光情報の発信」、「地域の観光振興」、「受入環境インフラの整備」、「賛助会員交流」、「海外からの旅行者誘致」など。

姫路市の文化財。

- ・姫路城 世界文化遺産、国宝、国指定文化財、特別史跡。
- ・書写山園教寺 国指定重要文化財、史跡、国登録文化財。
- ・姫路市立美術館 国登録文化財。

所感

姫路市は観光を中心に据えたコンテンツの発掘・磨き上げを行っていました。総入り込み客数の推移をもとに利用者幅が大きい姫路城周辺をターゲットに据えた、街中への回遊促進の取り組みとして、中心街活性化基本計画(令和2年度～令和7年度の5カ年)を行う計画をしています。

以前は、姫路駅北口から姫路城を見ることができませんでした。現在は工事が終わり北口から姫路城を見ることができます。姫路城までの道幅や歩道を広くしたことで、飛行機も飛ばせるなどと揶揄されたそうですが、現在では「歩行者利便性増進道路一ほこみち」として、歩いてみようと思わせる快適な歩行環境を作り出していました。(図1)

姫路城は50年に一度完全やりかえが行われ、小さな改修工事(天守を除く)は26年かけて行われ、継続した雇用と技術者の育成が行われています。今後は文化財に関わりたいと考えている人を呼び込む事業も計画されているなど、雇用と技術者の確保に積極的な取り組みを考案されました。

観光客の滞在時間を伸ばす取り組みとしては、姫路城以外の国指定文化財を活用してさまざまなイベントを行い、観光客の移動距離や滞在時間を伸ばす取り組みを工夫されていました。また、夜にしか行わないイベント・プロジェクションマッピングや簡易プールを作成してライトアップされて映った姫路城を見ることができる「鏡花水月」などの夜イベントを計画されていました。

唐津市でも観光コンテンツの磨き上げによる魅力向上や夜限定のイベントなど滞在時間を伸ばす工夫を行えばと感じました。

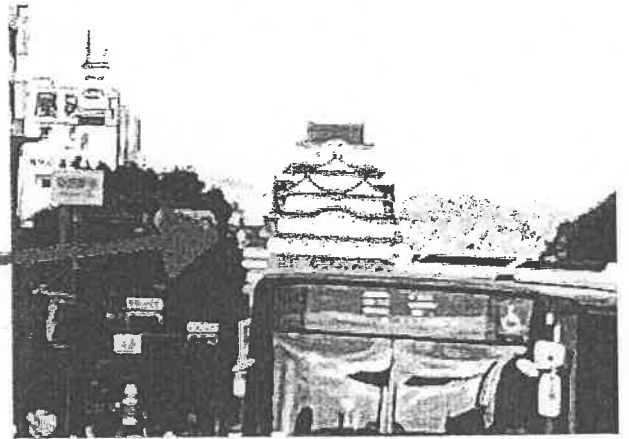


図1
姫路駅北口



夜の北口 若者が路上ライブを行なっている様子

「香美町の教育」について視察報告

浦田 関夫

令和4年11月14日に、~~鳥取県~~^{兵庫県}香美町に「学力向上ステップアップ授業」について会派の行政視察をしてきたので、以下のように所見を報告します。

香美町は、平成15年3町が合併し、人口約2万人、面積460⁺km²の中山間地帯です。

香美町には、小学校が10校と中学校が4校あります。

少子化に伴い、小学校一校を除き、9校が一学年一学級で複式学級もあります。

「チャレンジプラン」は実施して10年経過しているそうです。

小規模校の良さを活かして地域の特色ある小規模校ならでの教育ができないか検討され、多人数による教育や集団活動が制約され、入学から卒業まで同じ人間関係が続くことにより友達の固定化、序列化への不安、主体性・積極性や望ましい競争心の育成の不足など不安材料が保護者などから出されました。

小規模校の長所を活かしながら多人数での授業ができないかという課題について、小学校長や推進準備会、町教育研究所などが協議を重ね出されたものが「チャレンジプラン」だったそうです。

この推進に当たっての条件整備として、教職員の服務規程や学校管理規程のです。合同授業に当たっては、教師が他校の児童の指導ができるのかが検討され、校外学習の届の簡素化が図られました。

実施一ヶ月前に提出される「実施予定届」により、教育部局や市長部局のマイクロバス及び運転手の手配をされるそうです。

一話によると、教育委員会の課長さんも運転手に動員されることもあるそうです。

平成25年4月からはじまりました。

小規模校を二つのグループに分けて合同事業をおこないます。

5年生の「自然学校」(4泊5日)や6年生の修学旅行(一泊二日)も多様な合同学習としておなわれていました。

合同事業では、小規模校のデメリットと言われる「主体的な学び」「大勢の前で自分の考えを話し、仲間の意見を聞いて課題を解決できる対応力を学ぶ」その他に、「深い学び」など小規模校の課題点を解決する授業を創造されていました。

ステップアップ授業として、①わくわく事業②わかった授業の二種類の授業をしていました。

①わくわく授業は、合同による多人数授業で、「音楽や体育」の授業。

②「わかった授業」は、個人の能力に応じた少人数によるグループ分けて「算数や国語」などです。(複数の教師が担当)

成果として、お互いの学校同士のライバル意識が芽生えて、望ましい競争心や対抗意識が育ち交友関係が広がっているそうです。

香美町の実践は、小規模校の特性を活かしながら、大人数での授業や活動は示唆に富んだもので、唐津市にも小規模校が多数あります。

実践出来るものは、実践出来ればと思いました。

「百年の森構想」について視察報告

浦田 関夫

岡山県西粟倉村の「百年の森構想」について視察してきたので報告します。

西粟倉村は、「合併を選択しなかった村」として、村民や移住者に夢を与える取り組みを見ることが出来ました。

人口1500人で村職員が45人います。

村庁舎は、村内で産出した木材100%を使って出来て、木の温もりを感じる建物でした。

村は、生き残りをかけて、豊かな森林を活かした「百年の森構想」に添って「脱炭素の取り組み」へと発展させていました。

木質バイオマス発電、小水力発電、太陽光発電とエネルギーの自給自足へと発展していました。

「百年の森構想」は、2009年に事業をスタートさせました。

植林した杉や檜が50年経過し、50年先のビジョンを見据えて、「林業の6次化」＝付加価値の添加。

優良木材の育成と雇用・経済循環、安全で環境に優しい村づくりに取り組んでおられました。

移住者を受け入れるため「ローカルベンチャー」を47の事業が生まれ、206人が移住し、起業に取り組んでおられる人たちを村はサポートしていました。

森林伐採をした、製品にならない木材は、「薪ボイラー」として、熱として利用していました。

コストを比較すると、灯油より薪が半額程度安くなるとのことでした。

川の落差を利用して「小水力発電」にも力を入れ、売電収入が7000万円にもなり、その資金を元に、新たな再生可能エネルギー導入へ取り組んでおられました。

「小水力発電」は、電源のない「国定公園の街灯やトイレ」などの電源に使われたり、災害時の非常電源に使われていました。

落ち葉が水流を止める事で、「落ち葉の除去」が課題と話されていました。

「太陽光発電」は、村民参加型の取り組みで、村と村民有志が出資し「NPO岡山エネルギーの未来を考える会」を設立し、金融機関とも連携し、家庭での発電は中国電力に売電しています。

村では「家庭での新エネ・省エネ設備導入」に15事業に予算250万円を計上していました。

例えば、太陽熱温水器、太陽光発電、薪ストーブ、小水力発電、EV、家庭用蓄電などです。他に、省エネ型電気冷蔵庫買い換えには6万円も補助をしているそうです。

唐津市も「低炭素社会づくりの推進に関する条例」をつくっていますが、市民の足下の取り組みは支援が欠けているのではないかと思います。

足下からの「新エネと省エネ」への取り組みを感じながらの視察でした。

文化財を活かした観光施設について

「文化財を活かした観光施設について」兵庫県姫路市を2022年11月16日、視察してきたので概要を報告します。

姫路市の観光客の入込数は、コロナ過の前は、約1000万人前後が訪れていましたが、令和2年度は、約320万人へ落ち込み、令和3年度は420万人へ回復し、令和4年度は、外国客も増えて、回復傾向になっていました。

姫路市の「観光戦略プラン」は、観光の将来像として「観光を通じてにぎわいと感動にふれるまち姫路」をモチーフに、訪れてみたい、また来てみたい、と感じられるまち、姫路を目指していました。

計画期間として、2022年から2026年までの5年間かけて、5つの戦略として、①観光コンテンツの磨き上げによる魅力向上。②観光客のニーズを踏まえた受け入れ環境の整備③効果的なプロモーションによる誘客推進④国際会議観光都市・MIEC都市の推進⑤観光を活かした産業振興・地域づくりの推進を掲げて、総入込客数を1000万人の目標をたてていました。

具体的には、「観光コンベンションビューロー」を設立し、宿泊施設やお土産・飲食店など、観光関連を束ね姫路市と連携を取られていました。

姫路城は、「世界遺産」と指定されています。

その、歴史や歴史文化に触れることで、「千姫・忠刻復元着物」や「御姫様・お殿様なりきり着物体験」を実施されていました。

さらに、「大名行列」「姫路城ライトアップイベント」夏季限定の「姫路城内掘めぐり」「姫路城ナイトツアー」など多彩なイベントを切れまなく実施されていました。

特に、夜のイベントは、宿泊を伴うので経済効果も上がるとの事でした。

街中の回遊促進では、中心市街地活性化基本計画を策定し、街中の回遊性向上や商店街の魅力アップに努めていました。

回遊の促進の取り組みでは、駅前のタクシー待機場所(約70台)を移転し、「にぎわい交流広場」として整備され、快適な歩行環境が作り出されていました。

その他にも、「食文化」の発信やVR技術を活用したアプリなど、多彩な取り組みがなされ、来年度は、「姫路城世界遺産登録30周年」として、さらに、多彩なイベントを計画されていました。